

太刀の形 七本

一 本 目 相上段から先の ^{まぐらい} 氣位で互いに進み、先々の先で仕太刀が勝つ	
打太刀 (諸手 ^{もろて} 左上段)	仕太刀 (諸手 ^{もろて} 右上段)
① 左足を前に出し、諸手左上段に構える。	① 打太刀の動作に合わせて（以下同様なので略）諸手右上段に構える。
② 前足から三步で一足一刀の間合に進む。（以下同様なので略）	
③ 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ このとき、左足からひいて打太刀の剣先を抜き、右足から踏み出し、「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。
④ 下段のまま送り足で一步ひく。	④ 剣先を顔の中心につける。
⑤ さらに一步ひく。	⑤ 左足を出しながら諸手左上段に振りかぶり残心を示す。
⑥ 上体を起こしながら、下段から上げて中段となる。	⑥ 左足をひいて諸手左上段を下ろし、中段となる。
⑦ 構えを解き、左足から歩み足で五歩ひき、元の位置に帰る。（以下同様なので略）	

補足説明

- ① 左自然体となり、左拳を左額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、やや右に寄せる。
- ② ア. 機とは、相手の「心」と「体」と「術」の変わり際に起こるときの「きざし」である。
イ. この場合、打太刀が仕太刀に勝つ機会を教えているもので、仕太刀の十分になったところを見て打つ。
ウ. 打つとき反動をつけることなく、仕太刀の柄もろともに正面に打ち下ろす気構えが大切である。「打つ」とは「切る」という意味である。
エ. 上体はやや前傾するが、顔だけ上がる姿とはならない。
オ. 目付けは外さない。「目付け」とは、目と目を見合わせる事が原則であるとの理から「目を見る」こととする。
カ. 右足から踏み出すときは左足を伴う。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ③ ア. 送り足でやや前傾のまま二歩ひくことになる。
イ. その時の歩幅は仕太刀との間合によって大小あることに注意する。
ウ. 仕太刀の気位が十分に充ちたときにひくようにする。
- ④ 仕太刀が十分に残心を示した後、中段になり始める。
- ① 左拳を額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、正中線上とする。
- ② ア. 自然体でひき、諸手も後ろに引いて剣先方向に抜く。
イ. 抜きと打ちとは一拍子で行い、物打で打つ。
ウ. 左足から右足も伴って後方にひいて抜き、右足から左足を伴って踏み出して打つ。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ③ ア. 十分な気位で打太刀を押しながら行う。
イ. 顔の中心とは両眼の間をいい、剣先をつけるとは剣先の延長のことである。
ウ. 気位とは、鍛錬を積み重ねたことにより得られた自信から生まれる威力、威風のことである。
- ④ ア. 残心を示すとき、顔の中心を突き刺すような氣勢で押しながら行う。
イ. 残心は一本目から七本目まで形（上段または脇構えなど）の示されている、いない、にかかわらず、十分な気位で相手の反撃に対応できる身構え・気構えで行う。
- ⑦ イ. 元の位置に帰った後、いったん中段の構えになり、それぞれ次の構えになる。(以下同様なので略)

二本目

相中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (中段)

仕太刀 (中段)

① 相中段となり、間合に進む。

② 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し「ヤー」の掛声で仕太刀の右小手を打つ。

② 左足から左斜め後ろにひくと同時に剣先を下げて抜き、大きく右足から踏み出すと同時に「トー」の掛声で打太刀の右小手を打つ。

③ 中段になりながら、左足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

③ 相中段になりながら、右足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

④ 元の位置に戻る。

補足説明

- ②ア. 剣先が後方に下がらないよう振りかぶる。
- イ. 大技で仕太刀の右小手の位置よりわずかに低く打つ。
- ウ. 斜め打ちにならないよう一拍子で打つ。
- ③ 刀を抜き合せた位置に戻る動作は、打太刀が先に始める。(四本目、六本目も同様)
- ②ア. 剣先を下げる度合いは、おおむね下段と同じ剣先の高さとする。このとき、剣先を下げながら左後方にひらくので、その軌跡は自然に弧を描くことになる。ことさらに回して半円を描かない。
- イ. 両腕の間から打太刀の身体が見える程度に振りかぶり、斜め打ちにならないよう一拍子の太刀で正しく打つ。
- ③ 形に表さない残心なので、特に十分な残心の気位を示しながら行う。

三本目

相下段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (下段)

仕太刀 (下段)

- ① 相下段に構え、間合に進む。
- ② 間合に接したとき、^{きあらそ}気争いで自然に相中段になる。

③ 機を見て、右足から一步踏み出しながら刃先を少し右に向け、「ヤー」の掛声で仕太刀の水月（みずおち）を諸手で突く。

③ 左足から一步大きく体をひきながら、打太刀の刀身を物打の左鑓しのぎで軽く入れ突きに^な萎やし、右足から踏み出し「トー」の掛声で打太刀の胸部へ突き返す。

④ 右足を後ろにひくと同時に、仕太刀の刀を物打の右鑓で右に押さえる。

④ さらに突きの氣勢で左足から踏み出し、^{くらいつめ}位詰に進む。

⑤ 左足をひくと同時に、物打の左鑓で左に押さえる。

⑤ 三步位詰に進む。

⑥ 剣先を下げながら左足から後ろに歩み足で三步ひく。

⑥ 剣先を顔の中心につける。

⑦ 剣先を上げ中段になる。

⑦ 相中段になりながら左足、右足とひく。

⑧ 右足、左足、右足と出て刀を抜き合わせた位置に戻る。

⑧ さらに左足、右足、左足とひき、刀を抜き合わせた位置に戻る。

⑨ 元の位置に戻る。

補足説明

- ① 下段の剣先の高さは、相手の膝頭より約3～6センチメートル下とする。
- ② 気争いとは、双方の先に攻めようとする気の争いのことである。
-
- ③ 左鑓ですり込みながら突き、手元が上がらないように注意する。
- ③ア. 相手の太刀を手元に萎やし入れ、すかさず突き返すことを入れ突きという。
- イ. 体をひかないで手だけでひくと、突き返すときの間合が正確でなくなるので、打太刀の進む程度に応じてひき方に十分注意すること。
- ウ. 打太刀の刀身を萎やす程度は、打太刀の剣先の延長が体を外れるくらいにする。
- エ. 萎やすとき、左拳が正中線から外れないようにし、刃先は右下を向き、突き返すときは真下を向く。
- オ. 突き返すときは、打太刀の突く刀身と仕太刀が萎やし、突き返す刀身の縁が切れないようにする。
- ④ア. 仕太刀が突き返したとき、剣先を仕太刀の刀の下から返して、諸手をやや伸ばし左自然体の構えとなり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて右に押さえる。
- イ. 刃先は、わずかに右斜め下に向ける。
- ウ. 右足のひき方は、注意して正確に行う。
- エ. 左拳は、正中線から外れない。
- ④ア. 位詰とは、相手に対して優位な体勢を整え、充実した気位で相手を攻め寄せることをいう。
- イ. 突きの氣勢をもって、左足を踏み出し（二度突きはしない）気位で詰める。
- ⑤ア. 剣先を仕太刀の刀の下から回して返し、右自然体の構えになり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて左に押さえる。
- イ. 刃先は、わずかに左斜め下に向ける。
- ⑤⑥ すかさず右足から小足で三步やや早く位詰に進みながら、剣先を胸部から次第に上げ、顔の中心につけ、残心を示す。
- ⑥ア. 仕太刀の気位に押されて、剣先を下げながらひく。
- イ. 下げた剣先は、上から見たとき仕太刀の体からやや外れる。
- ⑦ 仕太刀が残心を十分に示した後、剣先を上げ始める。
- ⑦ 打太刀が剣先を上げ始めると同時に、剣先を下げて中段になりながら左足、右足とひく。

四 本 目 陰陽の構えから互いに進み、仕太刀が後の先で勝つ

打太刀 (八相) <small>はっそう</small>	仕太刀 (脇構え)
① 左足を前に出し、八相に構える。	① 右足を後ろにひき、脇構えになる。
② 間合に進む。	
③ 間合に接したとき、機を見て八相の構えから諸手左上段に変化して、右足から踏み出すと同時に仕太刀の正面を打つ。	③ 脇構えから諸手左上段に変化して、右足から踏み出すと同時に打太刀の正面を打つ。
④ 双方切り結んで相打 <small>あいうち</small> となる。	
⑤ 双方同じ気位で互いの刀身の鑓を削るようにして、自然に相中段となる。	
⑥ 機を見て刃先を少し右に向け右足から進むと同時に、物打の左鑓で巻き押さえてすり込みながら「ヤー」の掛声で仕太刀の右肺を突く。	⑥ 打太刀が巻き押さえてすり込みながら突くはなを、左足を左前に、右足をその後ろに移すと同時に大きく巻き返して「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。
⑦ 相中段になりながら刀を抜き合わせた位置に戻る。	
⑧ 元の位置に帰る。	

補足説明

- ①ア. 構えるときは左足を出し、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる気持で構え、刃先は仕太刀に向ける。
- イ. 諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、刀をとる位置は鐔を口の高さにし、口から約一握り離す。
- ウ. 上段に振りかぶってから、八相の構えになるのではない。
- エ. 左拳の位置はほぼ正中線上とし、刀身の傾きは後ろ上方約45度とする。
- オ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。
- ①ア. 構えるときは右足を後ろにひきながら、刀を中段から右拳がおおむね口の高さを通るくらいに大きく右脇にとり、左半身となる。
- イ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。
- ウ. 剣先は後ろに、刃先は右斜め下に向け、特に刀身が打太刀から見えなないようにする。
- エ. 左拳は、「臍」の右斜め下約一握りのところにおく。このとき、左手首は曲げない。
- オ. 剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。
-
- ③ア. 振りかぶる程度は、両腕の間から相手が見えるくらいとする。
- イ. 正面に打ち込むときは諸手を十分に伸ばし、斜め打ちにならないよう真っ直ぐに打ち下ろす
- ウ. 四本目は大技を示したものであるから、大きく伸びるようにするのがよい。そのため間合の取り方に特に注意しなければならない。
- エ. いったん上段をとってから打ち込むのではなく、振りかぶりと打ちとは一拍子で行う。
-
- ⑤ あいうち 相打になった後、間合が近すぎる場合は、打太刀が左足からひいて間合をとる。
- ⑥ア. 上体はやや前傾する。
- イ. 剣先の高さは水平よりやや低目となり、刃先は右を向く。
- ウ. 目付けを外さず、顔は仕太刀に向ける。
- ⑥ア. 左拳を頭上に上げると同時に、体を左に移し、刃先を後ろにして巻き返す。
- イ. 斜め打ちにならないよう真っ直ぐに大きく振りかぶって打つ。
- ウ. いったん頭上で止めて打つのではなく、巻き返しと打ちとは一拍子で行う。
- ⑦ 仕太刀に残心を示させつつ中段になりながら、左足から刀を抜き合せた位置に戻る。
- ⑦ 二本目と同じように形に表さないので、十分に残心の気位を示しながら、右足から刀を抜き合せた位置に戻る。

五 本 目

上段と中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (諸手左上段)	仕太刀 (中段)
① 諸手左上段に構える。	① 剣先を打太刀の左拳につけて中段に構える。
② 間合に進む。	
③④ 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出すと同時に、諸手左上段から「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ 左足からひくと同時に、左鑓で打太刀の刀をすり上げ、右足から踏み出すと同時に「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。 ④ 剣先を顔の中心につけながら、右足からひいて諸手左上段に振りかぶり残心を示す。 ⑤ 左足をひいて剣先を中段に下ろし、相中段になる。 ⑥ 右足から小足三步で、刀を抜き合わせた位置に戻る。
⑦ 元の位置に戻る。	

補足説明

- ③④ア. 顎^{あご}まで切り下げる心持で打ち下ろす。
- イ. 仕太刀の刀を目がけて打ち下ろさないようにする。
- ウ. すり上げられたとき、刀は死に太刀となり、構えを解いた程度まで落ちる。
- ⑤ 仕太刀が十分な残心を示した後、剣先を上げ始める。
- ① 左拳（手元）は、やや前に移行して構える。
- ③ア. すり上げは、両腕の間から相手の身体が見える程度に行い、払い面にならないように注意する。
- イ. すり上げは、打太刀の刀を頭上まで十分引きつけて物打の左鑄で行う。
- ウ. 剣先が下がらないようにして、一拍子で正面を打つ。
- ⑤ 打太刀が剣先を上げ始めるので、同時に相中段になる。